で，酒田の名家に生を受けるも放蕩して出奔，長崎で医術を学び酒田で開業するも遊女を妻とし，最後は往診の帰り道に患家で振舞われた酒が原因で森の中で寝込み，そこを狼におそわれて死亡する話である．体制に縛り付けられた封建時代において，自分の意思を貫けた人生は魅力的である．このように硬軟とりまぜた評伝書は，医療を考える上でも参考となり，是非一度お手に取ることをお勧めする．

（西巻　明彦）

［メディア・パブリッシング，〒998-0102 酒田市京田二丁目59-4-1，TEL. 0234（41）0022，2010年，A5判，200頁，1,400円＋税］

深瀬泰旦 著
『小児科学の史的変遷』

著者である深瀬泰旦氏は，日本医史学会の常任理事を長らく務められ，矢数医史学賞の受賞や大著『天然痘根絶史』（思文閣出版）をはじめとする多くの著書・論文を公にするなど，医史学界へ多大なる貢献をしてこられたので，ここで，あらためて氏の経歴について説明することは要しないであろう．

本書は，小児科医でもある深瀬氏が「長年抱いていた」と語る「小児科学の通史」についてまとめたものである．まさに氏の小児科学史研究の集大成といってよい著作である．

内容は，1983（昭和58）年から2007（平成19）年までに『川崎市小児科医会会誌』に掲載された論攷を中心に，全五章で編成されている．第一章は「I　感染症の変遷」，第二章は「II　歴史的な小児科書をよむ」，第三章は「III　疾病概念の変遷」，第四章は「IV　小児病の診断と治療」，第五章は「V　小児科学の誕生と小児病院」である．

小児科学の歴史は，これまで断片的に検討されてはきたが，そのすべてを網羅し，体系的に学術書としてまとめられることはなかった．この課題に果敢に挑みつつまとめられた本書は，歴史的に価値ある学術書として評価されるべき労作である．もちろん，『小児科学の史的変遷』と冠しているが，一書で小児科学の全容について取り上げるに至らないことは著者も自覚的である．挑戦的でありながらもストイックな面をもって執筆された内容は，氏が臨床経験から課題として生起した事項が選択されており，実証に至るプロセスも以上の課題意識に支えられながら一つひとつ丁寧に叙述・表現されている．

第一章「I　感染症の変遷」では，数ある感染症の中でも，「麻疹」，「仮性小児コレラ」，「脳膜炎」，「熱性けいれん」等が取り上げられている．

感染症は，公衆衛生対策として予防接種の普及・定着以降，生活習慣病へとその興味関心を奪われたようにみえた．しかしながら，近年のSARSや新型インフルエンザをはじめとする新興感染症・再興感染症の脅威は，深瀬氏が著した感染症との格闘史から，あらためて感染症の本質的課題と向き合う機会，そしてこうした事態に取り組むための教訓を与えてくれる時宜を得た内容となっている．

第二章「II　歴史的な小児科書をよむ」では，18世紀の小児科学の古典であるニスル・ローゼン・フォン・ローゼンシュタインの『小児科学の知識と治療』，マイケル・アンダーウッドの『小児疾病論』，そして，今日では自明のこととなった体温測定についての著作としてカール・ヴンデルリッヒの『疾病における固有の体温の様相』，診断学の歴史として名著とされているS・Jライザーの『診断術の歴史』を取り上げている．さらに，近代日本における最初の小児科医書である東京帝国大学初代小児科教授となった弘田長の『児科必携』を改訂版に至る内容の変化を追うことにより，我が国における診断や治療方法の受容過程

を克明に描き出している．また，第二章では，血液循環の受容史について，「ハーヴェイの血液循環論とその受容」の節にまとめられている．

第三章「III 疾病概念の変遷」は，新たな疾病概念の誕生と消退について，疾病解釈の違いや周辺領域における研究発展の影響などによる概念変化として「先天代謝異常の概念の歴史」と「Archibald Garrodのパラダイム」の節にまとめられている．これを受けて，氏の臨床経験より導かれた「新生児黄疸と体質性黄疸」についても考察が加えられている．さらに，病名の変遷と命名について検討したのが「背番号病―病名の変遷を中心に」，「発疹性感染症にみる病名の由来」，「文学作品に由来する2，3の病名」の節である．

第四章「IV 小児疾患の診断と治療」は，「診断学」と「探偵学」との対比において論じられた「シャーロック・ホームズのモデル ジョゼフ・ベル教授と診断学の周辺」，今日の科学的検尿法に至る変遷を検討した「視尿術から科学的検尿法まで」，下痢症における輸液療法の歩みとリンゲル液の完成過程等について叙述した「輸液療法のあゆみ」の三節から構成されている．

第五章「V 小児科学の誕生と小児病院」は，終章として，「小児科学の誕生と小児病院の歴史」としてまとめられながら，第四章までとは異なった新たな視点が考慮されている．その視点とは子どもの成長・発達であり，これを視野に入れながら執筆されている．小児科学にとって成長・発達は，小児科学分野の最大の特徴でもあり，それだけで一書をなすほどの広がりと奥行きをもつ．深瀬氏はその一端を「人工栄養法の確立をめざして」，「ヒトの成長についての研究史」，「東と西の育児論」の三つの節でまとめている．特に，ジム・タンナーなどの小児科臨床ではほとんど触れられることもない事績を丹念に読み解かれていることなど，その博覧強記はわれわれ後学の予想を遙かに超える．それとともに，子どもに対する健やかな成長を見守る視線と思いが本章の至る所に感じられる．

以上，本書は全五章により構成されているのであるが，その内容は，医師，そして歴史家の専門的立場から検討がなされているために，詳細な分析過程については歴史的解明の現代的意義との接点が一見すると見出しにくい箇所もないではない．しかしそれにもまして，本書で示された小児科学の発展に寄与する人類の格闘史は，そのおりおりの小児科医療とその研究に携わった人々の子どもの健康への願いを細部にわたるまで追体験する貴重な経験を提供してくれる．

深瀬氏の長年にわたる小児科学へのまなざしと研究の蓄積が一書となって刊行されたことに深い敬意を払いつつ，本書を手に取られることを強くお薦めしたい．

（七木田文彦）

［思文閣出版，〒606-8203 京都市左京区田中関田町2-7，TEL. 075（751）1781，2010年7月，A5判，604頁，9,000円＋税］

七木田文彦 著
『健康教育教科「保健科」成立の政策形成
――均質的健康空間の生成――』

本書は，戦後教育改革において制度化された「保健科」の成立過程を，戦前の健康教育運動から説き起こし，戦時中の国民学校令体練科体操における「衛生」を経て，今日の形態に達するまでを連続するものと見て，その経過をたどった論述である．

今までの通説は，戦後はアメリカ流の占領政策によって，戦前の教育が全面否定され，全く異質の教育理念が持ち込まれたという文脈で理解されていたが，これが戦前期の「健康教育」の伝統を